



幸野溝の改修工事……河壁はブロックで、底はコンクリートで固める

球磨南部開発の歴史

相良二万石 歴史は古い
徳川様でも 及びやせぬ
「球磨の六調子」で唄われるように、七百六十年の歴史をもつ相良公は、球磨川をはじめ、その地域の開発につとめてきた。

なかでも、今から二百六十余年前、家来の高橋政重氏に命じて、幸野溝と百太郎溝を掘らせた功績は大きい。
この両用水路のおかげで、当時二万石の中心もこの地帯であつたし（これは上相良八代までの菩提寺が、旧黒肥地村青蓮寺にあることでもうかがわれる。）今日まで、球磨川の豊富な水を利用して、二千六百畝の美田をやしなつてきたわけ

である。
ところで誰でも、球磨総合開発といえは、あゝ「市房ダム」のことかというだろうが、総合開発とはダムを造ることだけでなく、これを総合的にあらゆる方面に利用して地域の開発をはかることである。

球磨南部地区土地改良事業は、ひと口に「市房ダム」を水源として、三百五十年前に開きかされた幸野溝・百太郎溝を現代版に焼きかえ、コンクリートで改良して、二千六百畝の水田をやしなひ、さらに、この水路を延長して、一千畝の開拓地に導き、畑地かんがいを行なつて、農業生産を飛躍的に高めようとするものである。

「イモゴ」という悪条件

ところで、なぜこのような未墾地が球磨盆地の真中に、県道を挟んで残されていたのだろうか。その理由を簡単にいうと、昔の技術ではこの地域に水を導くことができない自然的条件が横たわつていたことと、さらにこの地域一帯が「イモゴ」と称する特殊な悪い土壌からできていたためである。

ひと目見れば、誰でもほればれするよくな、この広大な地域も、大正時代には県立種馬所（錦村一武）が設けられたこともあれば、また競馬場として利用されたこともあり、あるいは幾度か開墾もされたのであるが、いつの間にか昔のような原野にもどつてしまつたのである。
しかし、終戦を迎えると、この地域は戦災者、引揚者の就農の場として、国策に基づく緊急開拓事業の名のもとに、開

発事業が進められることになつた。

このようなことから、県では昭和二十五年頃から、昔の失敗をとり返さないように配慮して、この貴重な「土と水」を無駄のないように開発するため、当地域の調査にのり出したのである。ちよど建設省でも時を同じくして、球磨川の治水という観点から、上流にダムを建設する調査が始められ、これがいわゆる総合開発の動き出しということになる。

この地域のすがた

このようなすう勢の中において、事業計画の調査はスタートしたのであるが、計画の根幹をなす幸野溝や百太郎溝、或いは開拓地等についてその状況を述べよう。

幸野溝

幸野溝の開きかたは、今を去る二百六十五年、すなわち元禄十年、相良城主頼喬公の命を受けた高橋政重氏によつてなされたが、工事の途中元禄十四年五月に大災害をこうむるなど、幾多の困難を克服して満九年の歳月を費やして寛永二年十二月、ようやく完成したものである。

取入口は水上村馬越地点の岩盤上に木ワク、石積みみの井堰を設け、石造り

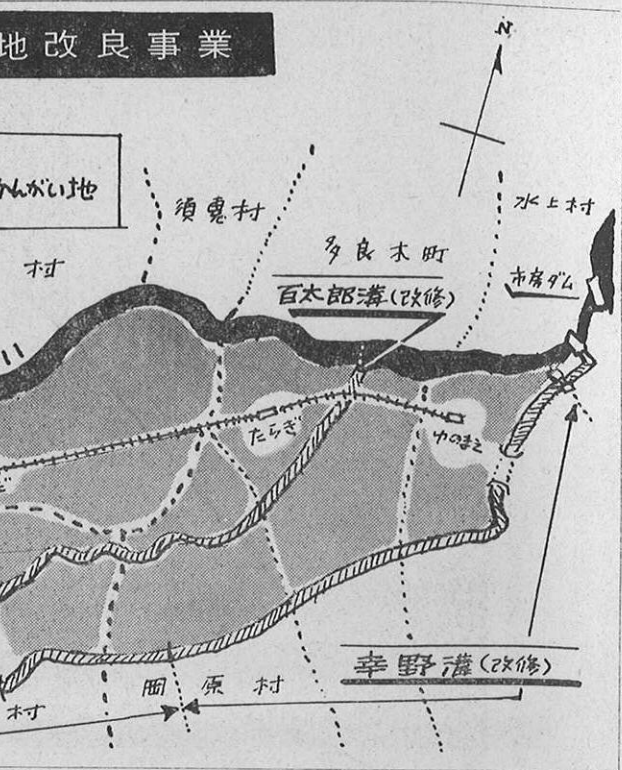
剣豪も開拓にひと役……

丸目石見入道徹斎藤原長恵（はじめの名を蔵人佐）は、穴沢浄賢や正田文五郎、柳生又左衛門らとともに、真影流の元祖である上泉伊勢守の高弟で、のちにタイ捨流を案出した剣豪である。その強さは、小山勝清著「それからの武蔵」に記されたとおりである。

丸目蔵人佐は、諸國を試合または真剣勝負して廻つたが、誰一人として自分に勝つものがなかつたので、肥後国求磨郡に帰郷した。
帰郷の翌日、早速相良

長毎公に御目見得付かつて名を石見と改められ、新知百七石を拝領し、長毎公、頼寛公、長秀公らに剣術のご指南をすることとなつた。
丸目石見は老後、長毎公から旧一武村の切原野一円の土地を賜り、ここに家を作つて隠居し、大谷から水を引いて切原野に通して、原野二町一反歩余を水田にし、また旧一武村曲谷からも水を引いて、三町二反歩余の水田をつくつた。
ここは、今なお、美田として残つてゐるが、これが球磨南部開拓のはじまりといわれる。

水門によつて最大毎秒七立方分の通水ができるようにしてゐた。水路の延長は一万五千八百二十米、隧道六百五十七米、水路の勾配は千分の一・四千分の一で、途中、都川、牧良川等の溪流と平面交叉をして、末端は上村神殿原に至り、その水田面積は、千八百八十五畝、関係町村は湯前町、多良木町、岡原村、上村の四カ村におよんでいる。
水路の現況は、大正末期から昭和の初期にかけて、若干の改修が加えられたが、殆んど素掘りのもので、途中に余水

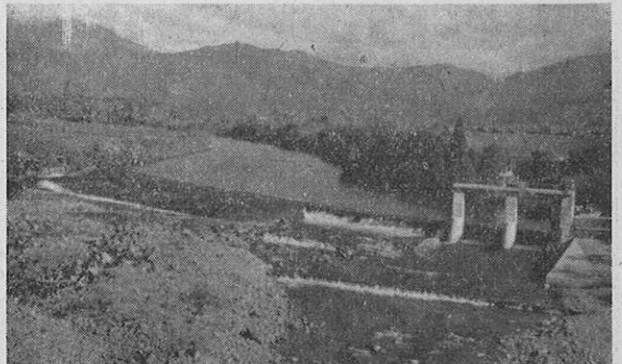


吐（通称、落し）が十二カ所、分水口が百三十カ所あつて漏水も多く、そのため、かんがい方法としては全地域を三ブロックに大別して配水してゐる状況である。

百太郎溝

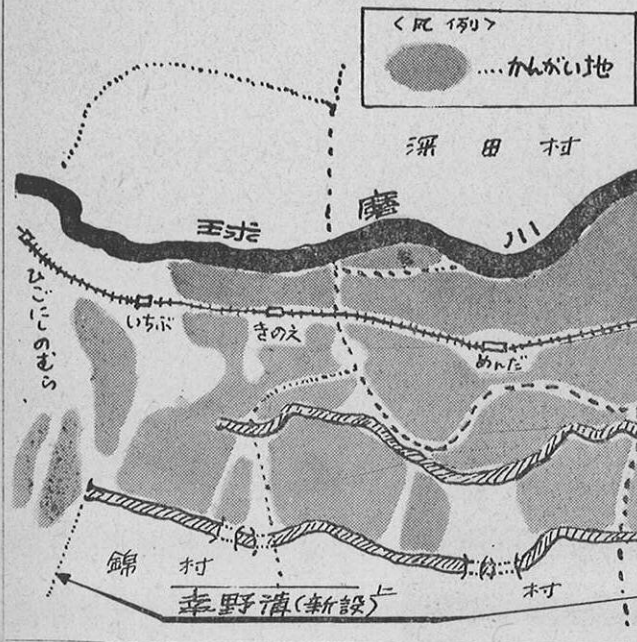
幸野溝と同様、相良公の命を受けた高橋政重氏によつて開きかたが始められたもので、今から二百六十六年前の元禄九年十二月工事着手以来、五期にわたり工事が行なわれており、その竣工の時期は明確でないが、取入口にある水戸神社創設が着工以来十五年目の宝永七年八月二十八日と記録されていることからみると、おおむね宝永七年に竣工したのではないかと考えられる。

取入口は球磨川の幸野溝取入口地点より六・五軒下流の多良木町百太郎地点に石積みみの井堰と石造りの水門を設け、最大毎秒七・七立方分の通水断面で、ほぼ、幸野溝に平行して開きかされ、その延長



百太郎溝取水口……左に遠く市房山が見える

球磨南部地区土地改良事業



一、八千七百十畝、勾配二千分の一、また途中、仁原川、赤坂川等の溪流と平面交叉をして、幸野溝の排水をうけなが村原田川にいたつてゐる。その受益面積は千三百八十七畝、関係

メ

球磨南部地区土地改良事業

- 事業主体 熊本県
- 着工 昭和33年度
- 完成 昭和42年度
- 総事業費 7億1,232万円
- 受益面積 { 水田 2,600ha
開拓地 1,000ha
畑 }
- 事業内容
 - (幸野溝) { 11,217mの水路コンクリート改修
13,500mの水路新設
 - (百太郎溝) { 取水口改修
16,274mの水路コンクリート改修
- 事業効果 米換算 年間 3,000トン (2万石余)